

冬季における琵琶湖北湖でのニゴロブナ当歳魚の資源状況			
[要約]平成6年度以降、毎年、ニゴロブナ当歳魚の資源状況調査を実施しているが、近年の放流魚の混獲率は概ね40～50%であった。また、資源尾数については平成13年度までは非常に不安定であったが、平成14年度以降は3年連続して200万尾以上となっており、平成16年度は本調査を実施して以来、最大の360万尾であった。			
水産試験場 栽培技術担当		[実施期間]	平成6～17年度
[部会] 水産	[分野] 琵琶湖漁業	[予算区分]	[成果分類] 研究

[背景・ねらい]

ニゴロブナ資源の回復に向けて様々な事業が実施されているが、特に種苗放流については強力に推進されてきた。一方、当场では、その結果のモニタリングとして、平成6年度から毎年、冬季における琵琶湖北湖での当歳魚の資源尾数推定や放流効果調査が実施されてきている。そこで今回は、放流効果調査結果を中心に資源状況について報告する。

[成果の内容・特徴]

ニゴロブナの種苗放流は、(財)滋賀県水産振興会（以下、「協会」という）で実施されており、全長20mm種苗と全長120mmの2種類の種苗が放流されている。調査対象である平成6～16年度における、琵琶湖北湖への年間種苗放流量は、全長20mm種苗では水田で生産された種苗もあわせて300～500万尾であった。また、全長120mm種苗では、放流を開始した平成8年度では16万尾であったが、年々拡大してきており、平成16年度では104万尾であった。

放流効果や資源尾数の推定は標識放流調査により行った。標識魚については、協会が放流した種苗の一部、および当场の試験研究で放流した種苗に、ALC標識を施して放流された。再捕調査は、沖曳網で混獲されたニゴロブナ当歳魚を対象に実施してきた。

放流魚の混獲率（当歳魚全体に対する放流魚の割合）は、全長120mm種苗の放流が開始される以前の平成6および7年度では29.3%および15.0%であった。そして、全長120mmの種苗放流が開始された平成8年度以降については、平成8、9、および15年度の18.8%、85.5%、および72.0%を除けば、概ね40～50%で推移していた。なお、平成16年度の混獲率は45.0%であった（図1）。

当歳魚の資源尾数について、平成13年度以前では平成8および11年度のように200万尾を超えるときもあるが50万尾を下回るときもみられる等、非常に不安定であった。一方、全長120mm種苗が100万尾以上放流されるようになった平成14年度以降では常に200万尾以上であり、平成16年度は本調査を実施して以来最大の360万尾となり、漁獲量の増大が期待される（図2）。

資源尾数と混獲率から天然由来の資源尾数を推定したところ、当歳魚の資源尾数と同様に、平成13年度以前では平成8および11年度で高くそれ以外の年度では低いという傾向がみられた。そして、この資源量の大きな変動は、平成14年度以降も続き、平成15年度では65万尾、平成16年度は198万尾であった（図3）。

[成果の活用面・留意点]

本調査は資源状況等のモニタリングであり継続して実施していく必要がある。さらに、南湖でも同様な調査を実施し、琵琶湖全体の資源状況を把握したい。

[具体的データ]

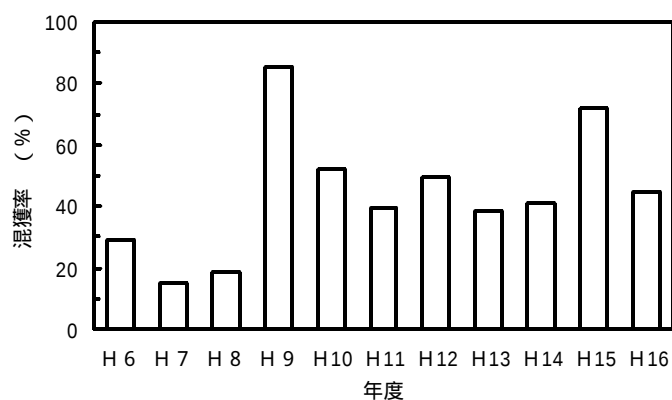


図1 琵琶湖北湖でのニゴロブナ当歳魚における放流魚の混獲状況

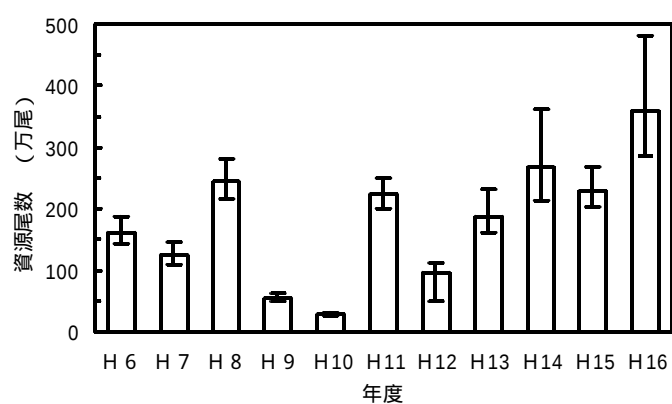


図2 冬季における琵琶湖北湖でのニゴロブナ当歳魚の資源尾数の推移

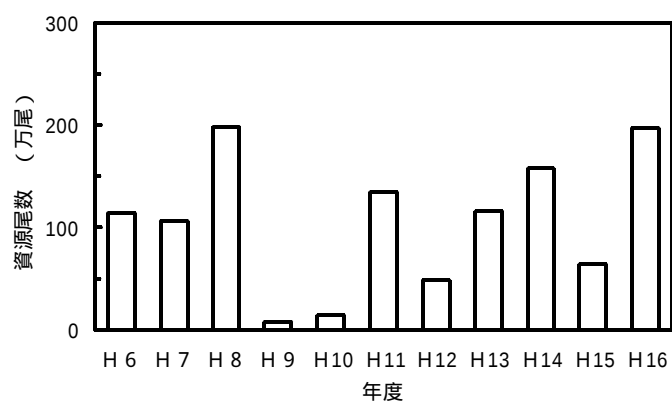


図3 ニゴロブナ当歳魚における天然魚由来の資源尾数の推移

[その他]

・研究課題名

大課題名：琵琶湖の水質・生態系保全に配慮した特色ある農林水産技術の開発

中課題名：安定的な水産資源の増殖技術の確立

・研究担当者名

根本守仁 (H9 ~ H10, H14 ~ H17)